

遙か彼方まで続く青い空と白い雲。その果てにはまだ誰も到達した事が無いと言われている。

幾つも浮かぶ巨大な大陸は人の目から見れば圧倒的な存在感を残すが、世界規模から見れば路傍の小石の様に些細な存在である。

しかし、その小石には全てが異なる多くの人々が集い、様々な思想や思惑が交錯しては同調し、時に敵対する。

その中の一つ、とある大陸に本部を構えている巨大組織が『騎空団連合ラファール』である。

依頼人と騎空団との間を仲介しては依頼を紹介し、本来独立した存在である騎空団たちに安定した報酬を与えてくれる、騎空士たちの間では有名な組織である。

「じゃあな団長、俺もアルドラちゃんと街に出るから後は頼むぜ。さあ、アルドラたん！パパといっしょに行きま  
ちようね〜♥」

その日はドラフの凄腕の傭兵、アギエルバが所属する騎空団も組織から受けた依頼の達成を報告しに連合の本拠地がある街に船を寄せていた。

暫くの間多くの仲間と空の旅を続けていたため、飛行艇の整備と荷物の積み込みに時間が掛かるらしい。それを聞き、アギエルバは団長に許可を取って愛娘のアルドラと街に足を延ばした。

他の町ではアルドラと一緒に食事をしたり買い物をしたりとその時の気分によって行動を決めるのが普通だが、この街に来た時は向かうべき場所はほぼ決まっている。

暫くアルドラの手を引いてゆっくり歩いていると、先程まで依頼の達成を報告しに来ていた連合の本拠地がある大

きな建物の前に辿り着く。

すると、二人の到着を待っていたように立派な顎鬚と一對の角を生やしたドラフの大男が建物から出て来た。硬く屈強な肉体に包まれた巨体を持つアギエルバに勝るとも劣らないその男は、その穏やかな笑顔を浮かべた優しい表情を二人に向けた。

捲った袖から太く鍛えられた腕が覗き、若干丸く固太りした腹を覆うように大きなエプロンを下げている。大きなバンダナはドラフ特有の大きな角と尖った耳の上を掠めて頭に巻かれている。

「お、やつと来たね。二人も待ちかねてたところだよ」

大男は細長い目の代わりに太い眉毛を嬉しそうに上下させると、白い歯を見せて笑いかけた。

肩に乗り上反りに曲がった角を掴んでいる息子と、足元で太い指をギユッと掴んで立っている娘に声を掛けた。

「ほくら二人共、アルドラちゃんに来てくれたよ。気を付けて遊ぶんだよ。それと。パパはいつも通り、アルドラちゃんの。パパとお話があるから、あんまり遠くへ行くんじゃないよ。陽が落ちる前には戻って来るんだよ」

そう言うのと、肩から元気に飛び降りた息子のガスタラと、キョトンとしながらも薄ら笑顔を浮かべる娘のガレットの背中を軽く押す。

「ん〜アルドラた〜ん♥すごく寂しいかもしれないけど我慢してくだちやいね〜。パパは少しガレットサちゃんとかスタラくんの。パパとお仕事のお話があるからなかなかよく遊んでくだちやいね〜。……但し、ガスタラくんには注意するんだよ。パパ以外の男はみ〜んな、アブナイ狼なんだからね〜」

膝を着いたアギエルバは愛娘のアルドラにいつも通りそう言い聞かすと、駆け寄って来たガスタラガの子どもたちにも満面の笑顔を浮かべた。

だが、ガレットサへとは違い、ガスタラに向けられた笑顔はどことなくぎこちない。

「……ガスタラクくん？アルドラを『キズモノ』のするような事はしないでくれよ？俺の大事な、だいじーなっ！可愛い娘なんだからな？」

笑顔の裏から発せられる威圧感にガスタラは気付く訳も無く、笑顔を浮かべたアルドラの手を引いて姉と一緒に広場の方角へと走り去っていった。広場には他の子どもたちが大勢手を振って待っていた。

そんな大人げないアギエルバの嫉妬を見ていたガスタルガが、若干困惑したように豊かな顎鬚を弄りながら近づいて来た。

「全く、アギエルバは本当にアルドラちゃんが大好きなんだな。僕も同じ親としてその気持ちは分かるが……ウチのガスタラにまでそんなに警戒しないでくれないか？ああ見えても、本当は心の優しい子なんだけどなあ」

「そ、そりやあ分かっているけどよ、なんつうか……嫉妬しない訳にやいかねえんだよ！ガスタルガも分かるだろ？俺以外の男とアルドラちゃんが楽しそうに笑っているのを見ると、どうしようもない嫉妬と疎外感が俺の繊細なハートを締め付けるうつのが……!!」

背中に背負った巨大な大剣を物ともせず身振り手振りを交えて大袈裟に熱弁を振るうアギエルバに、若干困りながらも結局は同意して頷いてしまう。

とても空全域にその名前を知らしめる最強の傭兵には見えないが、娘が絡むと途端にどこにでもいる親馬鹿な父親に変貌してしまふ。

「僕も気持ちは分かるけど、そろそろ場所を移さないか？君だって、今ほもつと『他の事』に時間を使いたいだろ？久し振りなんだから、本音の愚痴は『後』で……ね？」

アギエルバの肩に大きな掌をポンと乗せて、立てた人差し指で唇を塞ぐ。そのままガスタルガは表情を見せるように鼻先近くまで顔を寄せた。

「……お、おう。それもそうだよな。お前と二人つきりになるのも……もう何度目か分かんねえな。ま、久しぶりってのは間違ちやねえな。俺も早く『楽しみ』てえって思ってた所だぜ。……けどよ、新しく発見したアルドラちゃんの萌えポイントは後で絶対教えるからな!!」

同じくアギエルバも笑顔を浮かべるが、若干頬を紅潮させる。そのまま二人は肩を寄せ合って歩き出し、世間話をしながら『いつもの場所』へ移動する。

ガスタルガも仕事柄色々な人々と接する機会があり、正直に言えばアギエルバ以上に容貌と中身のギャップが激しい者も数多くいる。

だが、同じ種族であり同じ性別、同じ幼い子持ちという境遇、性格は正反対だが趣味嗜好は妙に一致したりと、ガスタルガにとっては特に親しく気を置かずに接せられる人物でもある。

だからこそ、つい気が緩んで一言余計な発言をしてしまったりする。仕事を抜きにして一緒に食事をして、子育て情報を共有したり、仕事の愚痴をつい漏らしたり、本当は秘密な情報をこっそり教えたり、子どもを他に任せて飲みに行つて訳も分からず騒いだり……。

そうして父親同士の仲を育んでいく内に、自然と互いの隠し続けた『本性』を曝け出して行つてしまい、同時にそれを互いに受け入れてしまった。一線を越える時は、いつもあつけなく唐突に訪れるものである。

「……最近アルドラちゃんが可愛すぎてなあ。抜く時間が全然取れなかったんだ。その分、結構濃くなつてると思っうぜ。へっへっへっへ……」

歩き始めて開口一言、躊躇も無しにに卑猥な内容を語り出すアギエルバだったが、周囲の喧騒に紛れて周囲の人々は聞き取れなかった。

唯一隣を歩いて聞き取れたガスタルガも、その内容をさも当たり前かのように受け入れて喜んだ。大きく張った腹

太鼓を威勢よく叩いて、そのまま下半身に腕を伸ばす。

「お、それは楽しみな。僕も最近新規の騎空団の対応に追われてね、全然処理してないんだ。もしかしたら、物凄く沢山出しちゃって、いつもよりも臭ってしまうかも知れないけど……」

「そりゃ良い！その方が俺は断然燃えちまうぜ！ドラフの雄たる者、精力絶倫じゃねえと話にならねえからな！」

「うん、やっぱりそうだよ。ちよつと心配したけど、アギエルバなら喜ぶと思つたよ。……僕も、濃くて汚い方が一層ドキドキしちゃうよ。アギエルバのよりも臭いかもしれないよ」

「なーに言つてやがんだ！前線でガンガン暴れる俺の方が熟成早いに決まってる！直に飲ませてやるから、直接味わつてみやがれ！」

「僕のも零さず飲んでくれよ。じっくり静かに熟成させるのも悪くないからね」

卑猥な下ネタ談義を思春期の小僧並みに繰り広げながら、二人の中年ドラフは足を動かし続けた。

『いつもの場所』は立ち並ぶ幾つもの建物の間の脇道を右に左にと複雑に曲がった先、賑わいに満ちる表通りからは随分と離れた位置に建つ。

迷路のような道を二人は確信した足取りで進み続け、昼間にも拘らず人通りを殆ど見かけなくなつた頃、その足は不意に止まる。

他の建物と大して変わらない木造の建物の前、華美な装飾や看板が無い、一見普通の民家のように見えるが、窓という窓には全てカーテンが覆っている。

その建物の入り口と思われる小汚い扉をアギエルバが先に押し開ける。鍵の掛かつてない扉はすんなりと開き、ガスタルガも後に続く。

薄暗い室内に場違いなドアベルの透き通つた音が鳴り響くと、目の前を小窓の開いた鉄網と暗幕が仕切る。鉄網を突き抜けて置かれたカウンターに人影が現れる。

アギエルバやガスタルガと同じ、筋骨隆々なドラフの男らしい。一对の太い角のシルエットと大胆に露出した熱い胸板が暗幕の隙間から見える。

カウンター上の小窓からは、下半身にビキニパンツを一枚とブーツを纏つた下半身が覗く。腰幅は広く、骨盤と大腿骨の隙間に出来るレッグラインが大きく膨張したビキニパンツの中に吸い込まれている。

「おう、いらつしやい。……一応訊ねるが、ここはどういう場所か分かつてるかい？」

「ああ、勿論だ。そりや何回も世話になつてるからな。……二人分頼むぜ」

「はいよ、3000ルピ頂くよ。バスタオルとハンドタオルにロッカーキー、ゴムとオイルは中に置いてあるぞ」  
料金を受け取り二人分の道具一式を穴から差し出すと、男はすぐにカウンターの奥に戻って行った。

「つたく、相変わらず愛想が悪いな」

「従業員も『楽しみ』中なんだろうね。途中で邪魔されたら機嫌も悪くなるさ」

「なーにが『楽しみ』中だ。従業員なら真面目に接客しろってんだ。どうせ図体だけデカくてチンポは……」

「ほらほら、折角来たのに愚痴ばかりじゃ萎えちゃうだろう。愚痴り合うのは僕たちの『楽しみ』が一段落着いてから。な？」

ガスタルガが背中を押して奥へ進むよう促す。

店の奥から聞こえて来る肉体がぶつかり合う音と激しい水音、そして野太くも甲高く吠える声の醸し出す妖艶な雰囲気でも、その穏やかな表情は崩れない。

なだめられたアギエルバは一度深く溜め息をついて気分を切り替える。苛立ちを脳内から押し出し、ガスタルガと一緒に店の奥へ進む。

分厚いカーテンと仕切り板で閉鎖的なロッカールームは非常に暑苦しく、立っただけで地肌から汗が滲み出てしまう。ロッカールームと言っても多少幅広の通路の壁面をロッカーにしただけである。一際大柄なドラフの男ばかりが行き交うので腕同士が触れると滲んだ汗でヌルリと滑る。

奥から聞こえて来る淫らな物音も大きくなり、店の至る所から何重にも重なって聞こえてくるのが分かる。立ち込める熱気が湿り気を帯び、生臭い臭気が流れ込む。

来ていた装備を脱ぎロッカーに仕舞うアギエルバとガスタルガ。武器持ちの騎空士の事も考えてか、アギエルバの大剣も収納できるほどに大きい。

「おい、あの大剣にあのガチガチの筋肉……傭兵のアギエルバじゃねえか？」

「マジでか。良く来るとは聞いてたけど本物は初めて見たぜ。……うおっ！ スツゲエ筋肉！ 尻もあんなデカくて、チンポは……うをつ！？ えげつねえ……!!」

「同じドラフでもあんな突つ込まれたら……ゴクリツ」

「アギエルバの隣は……マジか、ガスタルガじゃねえか」

「ガスタルガ？ 連合の受付やってる、あの糸目か？」

「子ども二人もいるのにまさかコツチ側とはねえ。いや、既婚子持ち中年ドラフとか堪んねえなあオイ」

「ガチガチマツシブと、固太りムニムニの子持ちドラフ……。ヤベエ、想像しただけで勃起しちまった」

背後を通り過ぎるドラフたちも殆どが全裸で、筋骨隆々な全身を真つ赤に火照らせて汗や油で卑猥に濡らしていた。途中アギエルバたちの正体に気付いてからは、囁き合おう声が幾つも耳に入り出す。

勿論、ボサボサに生い茂る股間の陰毛からは、天高く勃起したりしていなかったりする肉棒が丸見えになっていく。太さ、長さ、亀頭の剥き具合、玉の大きさ等各々異なる形状だが、大柄なドラフ故にその平均は限りなく人間以上である。

そして、アギエルバもガスタルガも一見して平均以上だと分かる程に巨大で雄々しい肉棒を股間にぶら下げている。た。

見事に赤黒い亀頭を晒した肉棒は重そうに内腿の間を往復しながら揺れており、並み居る巨漢たちの中でも特に存在感を示している。

ロッカーの鍵を閉めて奥に進もうと振り返れば、自然と周囲からの視線を集める。雄々しい魅力に目が無い雄ドラフたちの性的興奮を早らせる。



「へへっ、やつぱり男は豪快に見せ付けた方が断然気持ちいな。コソコソ隠しる奴をみると、タオルふんだくりたくなつちまうぜ」

「ふ、ふんだくるのはやり過ぎだと思っけど……僕も隠さない方が好きだよ。……こんなに沢山の、雄好きのマッチョな人たちに見て貰えると思っただけで……」

狭い廊下を進むガスタルガの足が途中で止まると、壁に寄り掛かって仁王立ちになる。同時に、アギエルバや雄ドラフたちの視線が注がれる中で両腕を持ち上げ腋毛が生い茂る腋を晒す。

そして、足を広げて腰を突き出すと、意識的に呼吸を激しくさせて自慢の肉棒を徐々に勃起させる。角と同じように上反り気味に持ち上がる肉棒は若干丸く飛び出た腹の肉の下で太い血管を脈動させて、重そうにぶら下がる金玉袋を雄共の前に持ち上げた。

脳内で想像した厳つい雄共の阿鼻叫喚の肉宴と周囲から突き刺さる視線と感嘆の声、それらが合わさってガスタルガの心を満たしていく。

「うお、マジか。ガスタルガがチンポ見せ付けてきたぜ」

「スツゲエ……。下手なライフルの銃身よりもデカいんじゃないか？長さも太さも桁違えだ」

「何度見てもガスタルガの勃起は反則級だぜ。あんな丸つこくて可愛い顔してんに、一度乱れ始めたならそこいらの野郎なんざすぐに靡かせちまうからなあ」

「ひ、昼間あんな親身に案内してくれて真面目そうだったのに……。あ、あんなエロい姿見せて……。うう……。」

この街に訪れる多くの人々が知っている筈の素材でまったりとした雰囲気、雄々しく艶めかしいものに一変させる。

ガスタルガの正体を知る者の大半は日常での真面目な姿との際に驚き生唾を飲み干すが、過去にその性癖の発言

の場面に遭遇した者はレアモンスターでも見つけた様にじつくりと凝視する。

「んっ……はあ、はあ、ああ……。す、凄く興奮して、我慢出来なくなるう……。ふっ、ふんっ、んああ……」

四方から自分に向けられる飢えた雄の視線が、日常的に隠し続けたガスタルバの本能に火を灯す。腋を完全に露出させながら腰をゆっくり動かし、勃起した肉棒と釣り下がる金玉袋の存在を誇示する。

胸板に力を入れて乳首周辺の胸筋を上下にピクピク伸縮させては、太い首を仰げ反らせ更に腰を突き出しては気持ち良さそうに天を仰ぐ。

暗闇の中で得た最大級の開放感に身震いすれば、自然と喉仏が動き低い喘ぎ声が漏れる。

少しでも精力絶倫な雄を引き寄せようとする雌的な性本能に任せ、生唾を飲み込みながら全身を凝視し発情した肉棒を手持無沙汰に弄る雄共を挑発する。

ロッカー周辺の空間で屯っている雄ドラフは、大抵誰にも相手にされないか、待ち切れずに雄を手籠めにしようとする者ばかりである。

「や、ヤツベ……俺もう、我慢出来ねえよ……!」

一人がギンギンに勃起した肉棒を隠そうともせずガスタルガに近付けば、他の者も続いて立ち上がる。妖しく笑顔浮かべながら、逞しい腕を伸ばし……。

「おーっと悪いな。ガスタルガさんはこれから俺と『楽しむ』事になってるんだ。このアギエルバより先にこのエロイ体を頂こうなんて100年早いんだよ」

アギエルバは四方から伸ばされた太い腕を軽く振り払うと、ガスタルガの体を抱き寄せて躊躇なく唇を重ねた。

大きく口を開けて相手の唇を食ろうとすれば、ガスタルガも自然と口を開ける。互いに舌を突き出してグチュグチュと水音と共に絡ませ合えば、重なった隙間から溢れ出た涎が糸を引いて顎や胸板に滴る。

鼻から息を吸う度、途切れ途切れに短い喘ぎ声が漏れ出し両腕は背中と頭を強く引き寄せせる。硬く引き締まった背筋に指先を食い込ませれば、滲んだ汗で指先が滑り自然と動きが荒々しくなるだろう。

だが、求める様になってきたガスタルガの体を押し返すと、アギエルバは妖しく微笑むと視線を下に向ける。既に漏れてしまった先走りでネットリ濡れる亀頭が抱き合う最中に重なり合い、二本の間が透明な先走りの糸で繋がっていた。

濡れた亀頭は店内の薄暗い照明に照らされて妖艶な照りを帯び、照りの白い瞬きがウネウネと這いずるように形を変えれば、伸縮する鈴口の動きを強調する。

アギエルバが一步歩み寄り兜合わせの状態に亀頭を重ね、涎で濡らした大きな掌で二本の亀頭を一気に鷺掴みする。二人の腰が意思に反して突き上げられ、手首のスナップを利かせる度に全身がビクビク痙攣する。

鼻息荒く亀頭攻めをしながら視線を戻すと、口元から涎を垂れ流しながら快感に身を委ねているガスタルガの姿があった。腰を突き上げたまま間隔を開けての痙攣を繰り返し、切なげな視線を向けている。

亀頭だけでは我慢出来ないのか、その両手を自分の固柔かい胸板の上に置き、肉を何度も揉みながら指先で乳首を弾いて刺激する。

「おいおい、いつものガスタルガの真面目な顔はどこ行ったあ？他の野郎にマツパ見られた位で逝きそうになってんじゃねえよ！……マジもんに乱れるのは俺の前が最初って言っただろが」

そう高圧的な態度でガスタルガの腕を引くと、屯っていた雄ドラフ共の間を縫って奥にある個室へと向かう。薄暗いとは言え、使い慣れた発展場の内部である。どの時間帯にどの程度空き部屋があるか位は把握している。

何室か確認していく内に、鍵の掛かかっていない空き部屋を見付けた。長方形のマットレスが2枚並べられた空間をやや低い壁が仕切り、置かれた棚にはオイルボトルやコンドーム、チリ紙が無造作に置かれている。

開放的にされた天井付近からは反響する周囲の淫音が降り注ぎ、時には中の状態が気になる他の雄が覗き込むこともある。寧ろ、覗かれるのが醍醐味であるのかもしれない。

大柄なドラフ二人では若干狭いのだが、アギエルバはガスタルガの体を中に引き寄せるようにして再び強く抱き締めると、最小限の動きで鍵を閉めた。

そのまま押し倒すようにマットレスの上に体を投げ出す。倒れた衝撃で置かれたオイルのボトルが倒れ、積み重なったコンドームの山が崩れる。

「……ズリイなあ。俺だってよ、自分の一番淫乱に暴れちまう姿は、お前に一番最初に見て貰いてえんだよ。……なのに勝手に一人で盛り上がりやがって……寂しかったこっちの身にもなれってんだ、コンニャロ」

自分の想いを知らしめるように、だがじゃれつくような弱さでガスタルガの角を軽く叩き、更に引き寄せて体温を混ぜ合わせる。

威嚇する様な野太い声だが、抱き寄せる腕は優しく体を撫で回し、横目で見れる表情は羞恥と悦び、そして一抹の悲しさに染まっていた。

「ご、ごめんな。いつも先走っちゃって。そ、その……つい雰囲気飲まれてしまって。普段は、あの……さ、し、仕事も忙しいし、子どもたちの面倒も見なくちゃ……」

「……馬鹿野郎」

アギエルバは寂しげな口調で呟くと、言い聞かせるように大きな額同士を軽くぶつけ合う。視線が再び真正面であり、二人の顔は深まる雰囲気飲まれて自然と火照り始める。

「隠さなくても大体気付てるぜ。……その、奥さんとは今セックスレスなんだろう？ 小さい子一人だつて大変なのに、二人だつたらそりや旦那に目え向けられないんだろうな」

「……うん。そう、そうだよ。最近誘つても断れること多いししね。でも、僕はアギエルバの事が可哀想とか、妻の代わりとかじゃなくて、ちゃんと本気で……」

アギエルバの腕が更に強くガスタルガの肉体を引き寄せ、今度は互いの心音を重ねる。周囲から聞こえる淫らな音が聞こえない程に二人の意識は集中し、滲み出る寂しさに自然と体に力が入る。

「おう、そんな事言われなくとも知ってるぜ。……奥さんの事も、子どもたちの事も、俺の『女房』の事も、今は気にすんな。お前のそんな悲しい顔見たくねえよ」

「アギエルバ……」

「それに、お前が俺の事遊び半分にしてても、逆に奥さんと同じかそれ以上に想ってくれてても、一々気にしねえ。何っつか、責任逃れっぽいけどよ……」

一拍置いて、アギエルバは真面目な表情でガスタルガの悲しげな目を見据える。だが、次の言葉を続けよとしても恥ずかしそうに視線を泳がせ逸らしてしまう。

何度かの躊躇の後、意を決したように続きを呟く。

「俺は、今生きてる男の中でお前の事が一番好きだ。仕事仲間としても、こういう深い仲だとしても。人全体だとアルドラちゃんに余裕で負けちゃうけどよ、こっからアウギユステ……いや、こっからガロンゾ位の差で二番目に好きだからよ。だ、だから……」

再び唇を重ねた。今度は舌を挿入させず、唇の柔らかさと温かみを感じる穏やかな触れ合いであった。ガスタルガも愛おしい想いを隠そうとせず、唇を押し返し、その想いに応える。

「俺の事はそんなに心配するな。今までだってこうやって来たんだ。それに、騎空団の皆だって良くしてくれるから寂しくも無いぜ。だからお前もそんな悲しい顔しないでくれ。何かよ、俺がお前を虐めてるみてえじゃねえか」

「え、あ……ご、ごめん。また勝手に一人で突っ走っちゃったみたいで……悪かった」

「だーかーらー謝るなつての！……つたく、子持ちのおっさんの癖にそういふとこだけは鈍感になりやがつて」

「だ、だつてさ。アギエルバがそんな風に真面目な雰囲気で物を言ってくることに、あんまりなかったから……その……何かどうすれば良いか困つてね」

今度はガスタルガから体を寄せて背中に腕を回す。大きな肩に顔を埋めれば、角同士がゴンとぶつかり合つて脳に響く振動が生まれる。

何度も呼び掛ける様に角同士をぶつけ合い、互いの脳内に詰まった切なさや羞恥心を物理的に消していく。闘志を高め合う牛の様に激しさは増し、徐々に理性も崩れて本能が表に出て来る。

「……ねえ、今日はどつちがする？」

先に訊ねて来たのはガスタルガの方だった。顔は真っ赤に紅潮して、鼻息が荒い。二本の腕は執拗にアギエルバの体を撫で回し、特に内腿や尻を重点的に撫でる。

「決まつてるだろ。お前が勝手に気持ち良くなつてたんだ。謝罪代わりに俺を気持ち良くさせな。久し振りなんだから、手加減なしで来いよ」

応えたアギエルバも紅潮した顔で挑発的な笑顔を浮かべて白い歯を見せる。マットレスの上に四肢を伸ばして仰向けに寝転がると、股間にハンドタオルを掛ける。

ハンドタオルの中央は既にテントどころかポンチョの様に鋭く勃ち上がっており、上下にゆっくりと大きな動きで揺れてガスタルガを誘惑する。

無論、ガスタルガの股間からも皮がはち切れんばかりに膨張した肉棒が上反りに勃起し脈動していた。涎を垂らす鈴口がアギエルバの下半身を凝視している。

「分かった。僕の溜まりに溜まった物、全部アギエルバにぶつけるから簡単に逝かないでくれよ」

「へっ!! 大口叩けるのも今の内だけだぞ。……ほら、御託は良いからさっさと来いよ」

「言われなくとも、ね!」

ガスタルガは口元を妖しく吊り上げると、仕事中には決して見せない悪い笑顔を浮かべる。一見余裕綽々の態度を見せるアギエルバであるが、ガスタルガからして見れば内心これからされるであろう淫辱的な辱めを想像して、今か今かと襲われるのを待っている状態である。

本当ならば多少焦らしてアギエルバの自制心が途切れるのを待つのが良いのだが、ガスタルガ自身も既に雄のスイッチが完全に入ってしまったっている。

一度景気付けに拳を鳴らし肩を回すと、ガスタルガはその優しげな糸目で捕えたアギエルバの肉棒を目掛けて、開かれた股間へと飛び掛かった。

to be continued...

発行：蒔瀬文庫

発行者：ミスターウッド

発行日：11月8日

pixiv: 807475

twitter: @woodandleaf